

教科書から飛び出した日本語教育 —使える日本語への手立て—

大石 寧子 橋本 智
(徳島大学国際センター)

キーワード：日本語教育、使える日本語、サポーター

1. はじめに

徳島大学の日本語教育は、国際センターで行われていて、大別すると①日本語研修コース（約6ヶ月の集中講習型）②全学日本語コース（全学を対象として週2回実施）③共通教育の日本語・日本事情及び総合科学部の「日本語教員になるための科目」授業が3本柱となり、このほかに昨年より④アジア人財コース（アジア人財資金構想事業：留学生のための就職支援）と⑤共創型授業「国際交流への扉を拓く」が加わった。全ての授業において、知識にとどまらず四技能の運用力を身につける、「使える日本語」を目指している。

今回は、この中の日本語研修コースを事例として、検証していきたい。

2. 日本語研修コース

日本語研修コースは、文部科学省大学院入学前予備教育コースの国費留学生を軸として、学内の指導教員から申請があり、このスケジュールで学習が続けられる徳島大学の私費大学院留学生(含. 研究生)からなり、一日3コマ、月～金、約400時間の集中講習である。到達目標は①ややぎこちないが大人として一人で学内外の生活がおくれる②専門への橋渡しとすると定め、「使える日本語—運用力をつける」ことを方針とし、終日一教員担当制を取り入れている。

3. 本コースの特徴

3. 1 発話への道筋作り

本コースの学習者は、言葉の習得が最終点ではなく、その言葉を使って研究室で、生活で、様々なコミュニケーションをとらなければならない。即ち言葉は、道具である。そして実際の運用場面

では、そばに教員がいるわけではなく自らでその場面を乗り越えなければならない。したがって教科書のダイアログを丸暗記してもその場面どおりの展開に、遭遇することはごくまれであろう。遭遇したシチュエーションを習った文型や語彙・表現のうちどれとどれを結び合わせたら今の日本語能力でこの場面がのりきれのだろうかという道筋の習得が初級における運用力に大きく係ってくる。

徳島大学では、教科書を開いてはじめてから順番に1つずつしていくということは行っていない。コース開講前に教科書からそのコースに適したシラバス・語彙等を取り出し、そのコースの学習時間数やニーズに合わせてシラバスリストを作成する。学生は、授業中は教科書を開かないが、自宅に帰り復習時にその課の文型や語彙・練習が使われていることがわかり、自学での復習ができる。

3. 2 授業の流れ

授業の流れは以下のようなものである。

①クラス全員にとって具体的でインパクトある導入②文法整理後、ドリル・小会話へ発展③ドリル後半から運用に繋げるため、与えたものではなく各自で作成④最終の会話は、教科書や教師が作成した会話ではなく、教師はシチュエーションを提示し、学習者は、その日までの既習項目を繋ぎあわせ自分の力で乗り切る。

初級を終了しなければ発話できないのではなく、学習したもののどれとどれを結びつけたら自分のいいたいことが不十分ながらも言えるかと気づかせることであり、100%言えなくてもコミュニケーションがとれる、やがては100%に近づ

けるという実感を持たせ、自信を持たせることである。そのために地域サポーターや学生サポーターの取り込み、様々なタスク、催事、ホームステイ等がコースに組み込まれている。

3. 3 サポーター制

国際センターでは、日本語教育や国際交流に興味のあるボランティアで、地域の方々からなる「地域サポーター」と徳島大学の日本人学部学生・大学院生からなる「学生サポーター」を擁している。登録制とし、日本語教育でサポートが必要なときにメール等で連絡し、各自の都合のよいときに協力を願うシステムを取っている。

コースでのサポーターの役割には、会話やタスクの相手、動詞等の変換練習、スピーチの練習、日本語を使っての催事などのほかに、クラスに遅れがちな学生への文法・表記等の個別サポートもある。授業の中で教員と学生は常に一对多であるため、どうしても日本語母語話者との会話やタスク練習の時間は少ない。そこで、授業中及び授業後にサポーターにお願いし、会話やタスクの相手になってもらい、日本語母語話者と話す機会と時間を増やす工夫をしている。サポーター一人に対して学生一人ないし数人で実施している。ある学生はひらがなが十分に定着していない、発音が悪くスピーチが上手にできない、クラスの勉強についていけないなどの問題を抱えている場合、個別にサポートをお願いし、その学生に必要な指導をサポーターと協力して行なっている。

サポーター導入によりいくつかの効果が得られる。まず、学生の会話の相手が、話し慣れた教員でないということ。担当教員はどうしても学生の弱点を補いながら発話を理解しようとし、また学生も教員が理解してくれるだろうと予想して話す。しかしサポーターとのやり取りでは、学生は専門知識のない普通の日本人と意思疎通を図らなければならない。これは学生にとって、自身の言語の運用能力を高めるために非常に効果的だといえる。二つ目に、サポーターとの会話を通し、教員ではない日本人と話し臨場感を生むことができる。さらに、つたなくても学習した文法・

文型と語彙を使って日本人と話し、コミュニケーションをとることによって、学生に達成感、伝わる喜びを感じさせることができる。また来日後間もないときに始まる日本語学習なので、日本での友達・知人作りの人的ネットワーク構築の一助にもなる。

3. 4 様々な活動

前述のように、徳島大学の日本語教育は教科書を開いてそれを暗記する、というものではなく、いかに学生に「使える日本語」を身につけさせるか、運用能力を伸ばすかに重点を置いている。そのために、授業以外の様々な活動も行っている。それらの活動は単なる「行事」ではなく、自分の日本語を実際の場面で使用する、貴重な機会となっている。

国際センターでは毎月一回、ボランティアと共催の「国際交流サロンー日本語でしゃべらんで」を開催している。留学生と日本人と協働の場で、書道、茶道をはじめ各国の料理、阿波踊り、学生のお国紹介などの活動を取り入れ、学生が実際の場で、学習した日本語を駆使し、日本人と共に何かをやり遂げている。

また、コースの中では日本人家庭でのホームステイを行なっている。ホストファミリーの家庭に宿泊し、教室だけでは身に付かない、実体験を伴った日本語の習得に役立っている。さらに、近隣の小学校に行き、自分の国に関するスピーチを行い、教室とは違った雰囲気と聴衆を相手に日本語を話す機会を提供している。

おわりに

これからの課題としては、運用につながる宿題教材の開発であろう。現在その作成にとりかかり、来年度から試用版の使用をしていく予定である。

参考文献

林さと子他(2006)「第二言語と個別性」春風社
村岡英裕(1999)「日本語教師の方法論」凡人社
田中望(1988)「日本語教育の方法」大修館書店